

Ⅲ 新潟大学教育人間科学部附属養護学校における小・中・高の一貫性のある取組

1. 一貫性のある取組とは何か

当校は、小学部、中学部、高等部の三学部で構成される全校児童生徒 60 人の知的障害養護学校である。

私たちは、児童生徒の自立を「現在及び将来において、社会の中で自分の個性や力を発揮し、充実感を持ち続けて生きること」ととらえている。児童生徒が自立するためには、小学部から高等部までの長期のスパンにおいて、一貫性のある教育活動を展開することが重要である。この一貫性のある教育は、「指導内容」と「指導方法」両面にわたる系統性、継続性等を十分検討することによって、実現されるものとする。以下に当校の取組を述べる。

2. 指導内容に一貫性を持たせるための取組

1) 育てたい力を明確にした「自立につながる力の内容表」の作成

当校では学校生活を通して育てたい力を、「自立につながる力」と呼んでいる。この自立につながる力は、八つの観点から表され、観点ごとに育てたい力の内容を示している（表1）。さらに、それぞれの内容をイメージしやすいように、内容ごとに例文をあげ、「自立につながる力の内容表」を作成している。そして、この内容表を基に、「どのような力を育てるのか」を各学部の教師が共通理解した上で、教育活動を構想・展開するようにしている。

2) 各指導の形態で育てたい自立につながる力を明確にした対応表の作成

自立につながる力をどの指導の形態で育てるのか、各学部で明確にする。さらに、各指導の形態で育てたい力について、優先的に育てたい力を明確にし、「A；年間を通して重点的に育てたい内容」「B；単元・題材によって育てたい内容」「C；配慮事項として扱いながら育てたい内容」の三段階の順位を付ける。このようにして、自立につながる力と指導の形態との対応を表した一覧表を各学部で作成している（表2）。

3) 単元・題材で育てたい自立につながる力を明確にした年間指導計画の作成

各指導の形態で育てたい自立につながる力を踏まえ、

以下のように年間指導計画を作成する（表3）。

①単元・題材の目標を基に、各単元・題材でどのような自立につながる力を育てるのかを明らかにする。その力を育てるために必要な学習活動、主な支援等を構想する。

②各単元・題材で育てたい自立につながる力を踏まえ、指導の形態で育てたい自立につながる力が、バランスよく育成できるように、単元・題材を配列する。

③学部行事等で育てたい自立につながる力を明らかにするとともに、単元・題材との整合性を図り、年間指導計画に位置付ける。

4) 年間指導計画を踏まえた単元・題材の構想・展開

年間指導計画に基づき、単元・題材の活動構成、環境構成、教師の働き掛け等の具体的な支援を構想する。その際、「単元・題材で育てたい自立につながる力が、その支援で本当に育成できるか」について十分に検討した上で、日々の授業を展開する。

3. 指導方法に一貫性を持たせるための取組

1) 個別の指導計画の作成・活用

当校では児童生徒の自立につながる力の育成を目指し、個別の指導計画を作成している。この個別の指導計画は、日々の授業を方向付けるものであり、一人一人の指導方法のよりどころになるものとしてとらえている。したがって、指導方法に一貫性を持たせるためには、この個別の指導計画の記載内容、整合性、継続性等を毎年度十分に検討した上で作成し、実効のあるものとして活用することが重要であるとする。以下に、具体的な取組について述べる。

①指導の目標、支援等を共有化する

当校の個別の指導計画の記載内容は、実態、指導の目標（発展目標、長期目標）、具体的な支援、長期目標の評価等である。指導の目標は、発展目標（各学部で卒業時に願う姿。小学部は2、4、6年生終了時に願う姿）、長期目標（指導の形態ごとに1年後に願う姿）を設定することを基本的なとらえ方として共通理解している。さらに、教師全員が同一步調で支援できるように、「いつ、どこで、だれが、どのような支援を行うのか」など、長期目標に向けた支援方法を各学部で検討している。

表1 自立につながる力の内容（抜粋）

自立につながる力（八つの観点）	自立につながる力の内容
観点1 豊かな心	①興味・関心を持つ ②豊かに感じたり表現したりする ③目的・見通しを持つ ④向上心を持つ ⑤穏やかに過ごす
観点2 健康な体	①体を動かす ②体を清潔にする ③健康に気を付ける ④安全に気を付ける
観点3 日常の生活動作	①食事をする ②排せつをする ③身なりを整える ④整理・整頓をする ⑤形、色、文字、記号、数などを活用する
観点4 コミュニケーション	①自分の意思を表現する ②他者の意思を理解する
観点5 集団生活	①人に関心を示したり親しみを感じたりする ②集団活動に参加する ③協力する ④決まりやマナーを守る ⑤周りの人に気を配る
観点6 地域資源の利用	①お金を大切に使う ②いろいろな施設などを利用する ③身近な交通機関を利用する
観点7 余暇	①一人で余暇時間を楽しむ ②人と一緒に余暇時間を楽しむ
観点8 家事・労働	①家事に関することに取り組む ②働く ③自分の適性を理解する

表2 自立につながる力と指導の形態との対応表（高等部 抜粋）

A	年間を通して重点的に育てたい内容	B	単元・題材によって育てたい内容	C	配慮事項として扱いながら育てたい内容						
指導の形態	自立につながる力（八つの観点）								指導の形態のねらい		
	1 豊かな心	2 健康な体	3 日常生活動作	4 コミュニケーション	5 集団生活	6 地域資源の利用	7 余暇	8 家事・労働			
								内容①家事		内容②働く	内容③適性
生活単元学習									興味・関心のある活動や行事等のテーマに向けて、互いのかかわり合いを生かしながら、意欲的に活動することをねらう。		
作業学習									生産・販売活動や現場実習等を通して、労働に対する意欲・態度など、卒業後の職業生活に必要な力を身に付けることをねらう。		

表3 高等部「生活単元学習」年間指導計画（抜粋）

時期	学年	単元名	目標	育てたい自立につながる力	主な学習活動
5月	全学年	「運動会を成功させよう」 5/13～5/27 (10)	運動会への見通しや期待感を持ち、応援などの準備活動に、友達と協力して楽しく取り組むことができる。	【豊かな心】 ②のびのびと歌ったり、踊ったりする。 ③目的や楽しみに向けて、期待感を持ちながら過ごす。 ④よりよくなるように考え、自分なりに工夫して取り組む。 【健康な体】 ①音楽に合わせて精一杯踊って楽しむ。 【コミュニケーション】 ①②自分の意思を表現したり、他者の意思を理解したりする。 【集団生活】 ③自分の役割や分担の仕事に、進んで取り組む。 ⑤小学部や中学部の児童・生徒を応援する。	・ 昨年のビデオを視聴する。 ・ 運動会の日程を知る。 ・ 応援団、チアリーダー、各係の役割分担（放送、開閉会式、用具係、表彰係）を決め、準備や練習をする。 ・ メガホンやマラカス、旗などの応援グッズなどを製作する。 ・ 応援やダンスの練習をする。 ・ 運動会の案内を作成し、交流先の施設・作業所や学校に送る。 ・ 運動会当日のビデオを見たり、作文や絵をかいいたりする。 【主な支援】 ・ 応援は、練習が進んできたところで、互いの経過を発表し合う機会を設定する。 （備考）運動会（5/24）

②個別の指導計画を授業づくりに活用する

個別の指導計画を授業作りに活用するには、「PLAN(立案)→DO(実践)→CHECK(点検)→ACTION(改善)」のサイクルが有効に機能する必要がある。具体的には、個別の指導計画を基に、単元・題材や児童生徒の支援を構想し(PLAN)、日々の授業を実践しながら(DO)、目標に迫っているか評価し(CHECK)、必要に応じて目標、支援等の改善(ACTION)を行うことである。各学部では、授業分析検討会を計画的に設定し、「指導の目標は妥当であるか」「児童生徒が目標に迫っているか」「適切な支援であるか」等を、個別の指導計画を基に検討している。

③評価システムを充実する

児童生徒の指導方法についての情報を年度ごとに確実に引き継いでいくためには、長期目標の評価と次年度への引き継ぎ事項をまとめる必要がある。そのためには、「いつ、だれが、どのように」評価するのか決め、それがスムーズに機能する評価システムが重要である。当校の短期目標は、単元・題材における個人目標ととらえており、この短期目標を評価する計画を授業担当者が作成し、日々の授業の測定・記録を行い、単元・題材終了時に総括的評価を行っている。さらに、年度末に蓄積した短期目標の評価を基に、長期目標の評価を行うとともに、次年度の指導目標、支援方法の引き継ぎ事項等を策定している。

2) 保護者との情報の共有

指導方法に一貫性を持たせるには、児童生徒の指導方法についての情報を教師だけが持っているのではなく、保護者と共有することが重要である。それは、情報を共有することにより、指導の目標や支援等がより最適化され、長いスパンにわたって引き継がれていくものになると考えるからである。以下に、保護者と情報を共有するための具体的な取組について述べる。

①参観日の取り方や内容を工夫する

保護者が自由に参観できるように、参観日を連続した3日間設定したり、参観したい日時を保護者が指定したりするなど、参観日の日時の取り方を弾力化する。また、児童生徒の指導の目標や支援等について意見交換が容易になるように、実際に保護者が学習活動を体験する時間を取り入れた参加型の保護者参観日を多く設定する。

②懇談会の時期や内容を工夫する

保護者との情報交換を密にできるように、個別の指導計画を基にした個別懇談会を各学部で計画的に設定する。児童生徒の指導の目標や支援等については、5～6月、長期目標の中間評価は10～12月、長期目標の総括的な評価等は3月にそれぞれ話し合っている。また、個別懇談会とは別に、より懇談内容を焦点化できるように、各指導の形態の学習グループごとの懇談会(作業班別懇談会など)を設定する。

③学習の記録(通知表)を改善する

当校では、保護者と児童生徒の情報を共有できるように、平成13年度より、通知表を学期ごとに配布することをやめ、単元・題材終了時に配布することにした。この通知表は、短期目標(単元・題材個人目標)、支援、児童生徒の変容等を写真入りでA4版1枚程度にまとめたものである。また、通知表には、保護者の意見や感想を記入する欄も設け、指導の目標や支援等を見直す際の資料としている。

4. 成果と課題

以上のような指導内容、指導方法に一貫性を持たせるための取組から、次の成果を得た。

1) 指導内容に一貫性を持たせる取組について

- ①自立につながる力を明確にしたことにより、学部経営計画や年間指導計画等の諸計画を作成する際によりどころとなり、各学部間の整合性を図ることができた。また、各指導の形態で育てたい自立につながる力を、各学部で明確にしたことにより、指導の形態の系統性、継続性を図ることができた。
- ②単元・題材ごとに育てたい自立につながる力を明確にしたことにより、短期目標(単元・題材個人目標)や支援等が焦点化され、教師間の共通理解が容易になった。

2) 指導方法に一貫性を持たせる取組について

- ①個別の指導計画を授業作りに活用したことにより、日々の授業のねらいと自立につながる力との関連が明らかになり、計画的な授業実践を展開できるようになった。また、児童生徒の変容を評価するシステムを構築したことにより、より適切な指導の目標や支援等

を設定できるようになった。

- ②参観日や懇談会の設定の仕方を工夫したことにより、家庭と学校との情報交換が活発になり、家庭と学校とが同一歩調で支援を展開することができるようになった。また、学習の記録（通知表）を改善したことにより、家庭と学校との情報交換が活発になり、保護者との連携が一層密になった。

以上の成果を基に、今後は次の3点の追究を深めていきたいと考えている。

- ①卒業生の追跡調査や外部の評価を基に、自立につながる力をさらに吟味していくこと。
- ②自立につながる力が育っているか評価するための評価規準を作成すること。
- ③蓄積された児童生徒への支援方法等を進路先の関係者に、スムーズに移行する手順、方法等を明らかにすること。

（新潟大学教育人間科学部附属養護学校・根津 博人）